

『「親日家のタイ人」は日本人だけが持つ幻想...』－①

2023年 12月 05日

（貿易ともだち）さん、みんな（がんばるチャン！）してるかな？（7450）

『「親日家のタイ人」は日本人だけが持つ幻想

日本がタイ人の眼中からなくなりつつある”納得の理由”』－①

く”温厚で他人にやさしい”イメージとは真逆！？微笑みの国・タイで「命がブライスレスではない」理由とは～

親日家のイメージがあるものの、いまやタイ人にとって、日本人は”嫌いではない”という程度の「無害な外国人」くらいにしか思われていない。

そう語るのは20年間にわたってタイに根差して生活し続ける高田氏だ。令和のタイ人たちの日本人観とはいったいどのようなものなのか。高田氏の著書『だからタイはおもしろい

暮らしでわかったタイ人の「素の顔」』（光文社新書）の一部を抜粋し、紹介する。

ボク（高田）がタイに移住した2002年9月の頃の日本人長期滞在者数は、日本の外務省が毎年発表する海外在留邦人数調査統計において25万人ほどだったので、日本人を見かけることすらあまりなかった。

ただ、当時は物価的にも、またライフスタイル的にも、ボクのような自分の意思で移住してきた人と企業駐在員の生活圏が重なることがなく、そのためあまり出会わなかったという事情もある。今は万国の中心部を歩けば日本人ばかりだし、知り合いにも必ず出くわす。

◆ タイ政府と日本政府の深いつながり

2000年初頭の日本人の海外旅行先は欧米が主流だった。あの頃のバンコクには団体旅行とバックパッカーという、予算的には両極端な日本人がわずかに観光に来ていた程度だ。格安航空会社はなく、いわゆるレガシーキャリアしかない。それでも、中東やアジアの航空会社を利用すれば日本国内旅行より安かったこともバックパッカーが多かった理由だろう。当時は燃料サーチャージもなかったのも、バンラデシュの航空会社だと直行便のビジネスクラスでも3万円台で往復できた。

その後タイ旅行がブームになって、訪タイ日本人がどんどん増えていく。最初こそ団体旅行で来ていた人も個人でくるようになる。タイには一度来た人を惹きつける魅力があったからにほかならない。物価が安かったのもあるし、何やら怪しい面が見え隠れし、それでもある程度は安全に旅行ができることがリピーターを増やしたのだと見る。

日本料理や日本の文化が好きだというタイ人は少なくない。国交が正式に始まって、すでに135年が経つので、タイ政府と日本政府のつながりも深い。そして、両国それぞれの象徴であるタイ王室と日本皇室もまたつながっている。

◆ 明仁上皇がタイに贈った魚「ティラピア」、「皇室御用達のタイ料理店が存在」

魚介類にも王室と皇室をつなぐエピソードがある。ティラピアはカワスズメという淡水魚の一種にあたる。生命力が強く、淡水・汽水（淡水と海水が混ざった場所）に生息し、なんでも食べる。繁殖力も高く、タイでは食用魚として一般的だ。タイではこの魚を「プラー・ニン」と呼ぶ。中国人あるいはタイ華人が名付けた「仁魚」の読みをそのままタイ語にしたものだ。ニンはすなわち「仁」という字のことだ。これは、平成時代の天皇陛下、上皇明仁を指す。

ティラピアがタイで一般的になったのは、上皇明仁が皇太子時代、当時のタイ国王プミポン・アドゥンデート王（ラマ9世）にティラピアを贈ったことがきっかけだ。上皇明仁が、タイの食料事情があまり良くないことを知ってティラピア50匹ほど贈っている。1965年3月25日のことだ。それからタイでティラピアが研究され、1年後には1万匹にまで繁殖させることに成功し、これらをタイ中の川に放流した。

タイ王室と皇室にはこういう交流があり、今でも日本の皇室がしばしばタイを訪れる。皇室御用達のタイ料理店もバンコクにあるほどだ。

～以下、(次号):「日本はタイ人の眼中からなくなりつつある...」に継続アップ～

(記事出典:高田 著「だからタイはおもしろい暮らしでわかったタイ人の「素の顔」/文春オンライン) blog up by Gewerbe 「貿易ともだち」 K・佐々木